

第六條 乱曲の論

底本・高知本 対校本・鴻山本・演博本

【翻刻】

第六 乱曲之論

乱曲蘭曲同前なり。世間に乱曲の謡とて何番と数定れる様に云事はあやまり也。元来蘭曲は文字にもミたる、と書也。祝言、幽玄、恋慕、哀傷にか、ハらす曲するを云也。音曲達たる人ハいつれの謡を乱曲にいわん事やすし。但はやき事ハすこしハ曲しかたかるへし。乱曲ハ祝言、幽玄、恋慕、哀傷此四音成就のうへの曲也。乱曲ハ是謡の正意にかなハぬ事也。当時の謡は祝言も乱曲にうたふ。目出度もなき事也。程拍子にたかハねは乱曲ハうたひの音にさへはつれねハしさいなしと見えたり。其故ハ家々人々の乱曲多ハふしかはれる事也。しかれとも乱曲と云からふし音声吟の色、句きり、拍子あひかはりたるやうにきこふるもの也。謡のかくをはなする人有笑止。声あやのよきを上手とする迄なり。其内かはれるふしをうたハんならハ其まへをするりとうたひて人のおもひよらぬ所にて奇妙の節をうたふへし。初より乱曲にうたふ事いか、有へし。此曲大事とする事ハ初心の人の謡事ならぬ故なるへし。此故に軽忽(ケウコツ)にさせじが為(タメ)ならんか。大てい乱曲謡の定ハ、真の乱曲①と云ハ東国下、西国下、隠岐院、嶋廻、草の乱曲ハ老松の曲舞、東岸居士の曲舞也。行の乱曲と申ハしらひけ、きさきそへ、先帝の身投。

乱曲を仏道に比すれハ文字言説にか、ハらす悟道に比す。

【校異】

①と云ハハ（鴻・演）

【現代語訳】

第六 乱曲に関する議論

乱曲。蘭曲は乱曲と同じである。世間では「乱曲の謡は何曲」といつて曲数が定まっているように言われるが、これは間違いである。もともと蘭曲は、「乱れる」という字を書く。祝言、幽玄、恋慕、哀傷にかかわらず、ふしに変化をつけることを云う。音曲の達人はあらゆる謡を簡単に蘭曲に謡う。ただし、早いとふしに変化をつけにくい。蘭曲は祝言、幽玄、恋慕、哀傷、この四つの曲種が習熟した上での曲である。蘭曲とはこれらの謡の正規から外れていることである。

現在、謡は祝言も乱曲に謡う。めでたくないことである。程拍子を違わず、謡の音程から外れさせしなかつたならば、乱曲は問題ないように思われる。それゆえに、家や人によつて乱曲のふしは異なることが多い「文脈不明」。そうは言つても、乱曲と云うから、ふし、音声、吟の音色、句切り、拍子がすべて違つていようなきこえるのである。謡の格を云々する人がいるが、笑止千万である。声の高度な技術を上手いとするまでのことである。そろそろ変わったふしを謡おうとするならば、まずなにくわぬように謡い、人の予想しないところで、世にも美しく珍しいふしを謡うべきである。頭から乱曲に歌うことは、いかなものだろう。この曲を大切にするのは、初学者の謡

うものではないという理由による。こういうわけで、軽々しくしないようにするのが良いのではないだろうか。一般的に、乱曲謡と定めているのは、真の乱曲は『東国下』、『西国下』、『隠岐院』、『島めぐり』、『草の乱曲』、『老松』の曲舞、『東岸居士』の曲舞である。行の乱曲は『しらひげ』、『きさきざろえ』、『先帝の身なげ』である。

乱曲を仏道に例えるならば、文字や言葉にできるものではなく、悟道のようなものである。

【解説】

現代において乱曲は思想と謡曲の一節という二つの側面を持つ。世阿弥の提唱した謡の五曲趣の一つ、そして技巧的な謡の奥義を駆使した小曲という理解である。

本章では、世阿弥の提唱した謡の五曲趣を実現する技術という観点から、特に乱曲が詳述される。まず、流布している乱曲についての誤解が訂正され、謡の五曲趣の一つという理解に引きずられて乱曲を祝言、幽玄、恋慕、哀傷と同列に扱うことが戒められる。次いで、曲趣は祝言、幽玄、恋慕、哀傷に四区分され、乱曲はこれらモードに關わらず「曲する」ことであると説く。

「曲する」とはどういう意味なのだろうか。複合動詞であり、一般的な古語辞典には載っていないが、「曲」という言葉の持つ節や楽曲という意味から類推すると、節をつけて謡うことであると考えられる。それではどのように実践するのだろうか。ヒントになるのは「人のおもひよらぬ所にて奇(キ) 妙の節をうたふへし」という言葉である。あるいは、「乱曲ハ祝言、幽玄、恋慕、哀傷此四音成じゆのうへの曲」という箇所である。「人のおもひよらぬ所」という言葉は謡本の記譜を離れて唐突に謡うことが示される。「奇(キ) 妙の節」、からは、定められた節付けから逸脱しつつも極上の美しさを持つ節を意味する。「四音成じゆのうへの曲」という箇所からは、最高奥義がうかがえる。合わせると巧みに即興を試みる高度な技法ということになる。「乱節」ではなく「乱曲」なのは、おそ

らく、分節化というよりも節を扱う高度に洗練された技術に力点が置かれているからだろう。

もつとも、即興とは言うものの、なんでもよいというわけでもない。約束事として、程拍子には合わす必要があり、謡の音組織の枠内に収めねばならないことも付け加えられる。したがって、乱曲は自由で勝手気ままな即興ではなく、ゆるく管理された即興ということになる。その他、具体的な乱曲の作法についても説明され、いきなり番組の最初から乱曲で始めることに疑問を呈し、聴き手の意表を突くが如く途中から乱曲を始めるのが良いとされる。

現行謡曲では、謡曲の区分は曲趣というよりもシテの役柄に注目して、脇能物、修羅物、蔓物、雑能、切能と分類される。あるいは吟の技法に注目して、強吟、弱吟に分類される。他方、元禄十四年（一七〇一年）に小河多左衛門が出版した六番綴謡本には、吟に並行して世阿弥による五区分から、祝言、幽玄、恋慕、哀傷が記されている（図版参照）。この版本が開版された貞享期には、五区分に基づいたなんらかの謡曲実践が行われていた可能性もある。乱曲は、これら四つのモードで謡われている謡をいきなり乱すように謡われたのではないだろうか。

【資料】

五音の巻。謡の大事。是に極むる所の条々。先、五音とは、祝言・幽玄・恋慕・哀傷・乱曲、此五つの声の分ちなり。よく心得べし。世間に謡手多く有と言ふとも、五音に謡分け候人は、稀也。五音正しく謡はずは、謡面白きと言ふ事有間敷なり。万事を捨て、五音の鍛錬・心掛け、肝要也。

「八帖花伝書 三巻」『古代中世芸術論』林屋辰三郎編、岩波書店、一九七三年、五四〇頁。

一、惣して謡物の上に吟といふ有謡曲も其通りにて強吟和吟などいひ来れるは全く声音の噂なり一人うたふを独吟といひ或は歌を吟する連歌俳諧も独吟両吟など、いふ所を以てみれば畢竟強く諷ふ和かに謡ふといふ名付と見ゆ勿論吟も強弱したかふてゆけども兎角吟といふは一通り別段にして是を能弁へされハ音シの移りなど不宣口伝
『音曲玉淵集 四』時中庚安編、今村義福補、大和田建樹訂、江島伊兵衛、一八九九年、一八一―一九頁。

松風 哀慕哀傷僧腸のまをまを
水衣腰子角帽子珠板扇
是ハ諸曲一見乃僧之ハ我末
三六五七六八度思百立西仙行脚

〔賀茂〕 箴 松風 蟬丸 身延 山姥 小河多左衛門、元禄十四年（一七〇一年）、丁付けなし（個人蔵）。
〔恋慕〕 〔哀傷〕 が記されている。

（上野 正章）

